The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語学校の非常勤講師たちの「労働世界」-公的議論およびインタビューにおける成員カテゴリー化の実践-
Author(s)	勝部, 三奈子
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91832
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（勝部　三奈子）	
論文題名	日本語学校の非常勤講師たちの「労働世界」−公的議論およびインタビューにおける成員カテゴリー化の実践−

論文内容の要旨

本研究の目的は、日本語教育を公的に議論する人々は日本語学校の非常勤講師たちをどのようにみなしているのか、また日本語学校の非常勤講師たちはどのような労働世界を構築しているのかを、社会相互行為的視座から成員カテゴリー化装置及び会話分析を用いて記述することである。本博士論文は全7章で構成されている。以下にそれぞれの内容を要約する。

第1章は、本研究の課題が日本語教育におけるどのような問題意識から設定されているのか、その問題意識の背景について概観し、本研究の目的と意義を論じている。第1章では現在の日本語教育を取り巻く社会背景やこれまで行われてきた日本語教師の議論、研究を参照しながら、日本語学校の非常勤講師が国内日本語教師の中で最も大きな割合を占めているにもかかわらず、これまでの議論や研究では焦点化されていなかったのはなぜかを論じている。ここではその要因として議論や研究が「日本語教師」＝「教育者」という枠組みで、主に教育実践に寄与するものとして行われてきたことを要因として挙げ、社会学的な観点から「日本語教師」＝「職業」という枠組みで日本語教師研究を行うことの重要性を提示している。

第2章は、主にこれまでの日本語教師研究を概観しながら、本研究の学術的意義を論じている。第1節では日本語教師の「自己イメージ/役割意識/ビリーフ/言語教師観/アイデンティティ」といった心的態度を取り扱う研究を「日本語教師のあり方の研究」と括り、研究の変遷を辿っている。ここでは先行研究のほとんどが教育実践に寄与するものであり、労働という側面の研究がなされてきていないことを指摘している。また第2節では日本語教師の労働やキャリア形成といった側面に焦点を当てた研究を概観している。この概観からは先行研究のほとんどが労働という側面を扱っているものの、第1節と同じく研究知見が教育実践へと還元されているものであり、取り扱っていたとしても、労働に関して生じる問題の原因を社会構造に帰属させ、当事者たちの視点が欠けていることを指摘している。そして第3節では第1、2節の指摘から、日本語教師の実際の労働について当事者の視点から読み解く研究の必要性を、本研究の分析視角であるエスノメソドロジーの観点から論じ本研究の学術的意義を再度示している。

第3章では、分析対象を分析する方法について論じている。具体的には社会学の分野で発展してきた「成員カテゴリー化装置」と「会話分析」を分析に使用することの意義を分析の方法とともに論じたのち、本論の各章に共通する具体的な分析方針を示している。また「成員カテゴリー化装置」についての批判も取り上げ、その批判を乗り越える解決的アプローチについて試論を展開し、ストコウの分析の指導原則とビルムスの場面意味論を援用する意義を論じている。また第4章では文化審議会国語分科会日本語教育小委員会の議事録を、第5、6章では日本語学校の非常勤講師のインタビューを分析対象としているため、各データの採取の方法やデータの選定理由やデータの性質を述べたのち、性質の違いによる分析の特徴もここで論じている。

第4章から6章にかけては研究の本論の部分である。

第4章では、まず公的議論における非常勤講師たちの位置付けを探っている。具体的には、日本語教育の推進・拡充のために2007年に文化庁に創設された文化審議会国語分科会日本語教育小委員会の議事録を分析対象として、「日本語学校の非常勤講師」が想定されるカテゴリー化の実践が議論においてどのように行われるかを記述し、「非常勤」というカテゴリー化によってどのような相互行為が達成されるか、また委員会のメンバーに共有される「日本語学校の非常勤講師」についての規範はどのようなものかを描き出している。分析の結果からは「非常勤」カテゴリーへの言及によって、日本語教師の数が増えないことへの説明や、質問紙調査の調査項目への疑義の投げかけ、専任講師と非常勤講師の日本語教育経験の差についての懸念の表明などといった行為が達成されていることが示されている。またその行為の達成には、「非常勤の献身的な貢献は労働条件に左右されない」、「非常勤は有償で提供している日本語指導を無償でも提供しうる」、「非常勤の所属機関を跨いだ指導経験は理想からは遠いものである」といった規範が用いられていることを明らかにしている。またこの規範の用いられ方から、あるときは「非常勤」に「プロ」としての専門性を求め、あるときは「ボランティア」的な献身を求めるという公的議論のメ

ンバーの無意識の実践が、日本語教育における「非常勤」の位置付けを維持していることを示唆している。

第5章では、当事者がどのように「日本語学校の非常勤講師」として自らを理解しているかを明らかにすることを課題として設定し、非常勤講師3名へのインタビューの質問と回答の連鎖の中でのカテゴリーの使用を記述している。分析する断片は待遇をめぐるトピックにおいて、調査協力者の回答の矛盾をつけるように構成された「挑戦的質問」を調査者が行なっている場面である。これらの断片において調査者は「授業準備」＝「適正な賃金が支払われるべきである」という規範を利用して「なぜそう考えているにもかかわらず、現在の状況に甘んじているのか」という趣旨の質問を構成する。それに対して調査協力者は「授業準備」＝「好き」/「面白い」といった主観的評価や他カテゴリーとの対比によるアイデンティティの構築を回答の資源として用いていることを明らかにしている。またそれぞれの断片からは「非常勤講師」についての規範として「続ける人は労働条件に不条理な点があってもそれをやめる理由とするほどには問題視しない」「非常勤講師には単にパターンプラクティスを行うだけのものいる」、授業準備への規範として「授業準備は異なる対象への工夫がおもしろい」「授業準備は自らが投資することもある趣味的なものである」、「授業準備は工夫や配慮をすることに価値がある」「授業準備は選好によって自主的に行われるもの、非経済的報酬を得られるものである」といった規範が析出された。これらの規範から、一般像としては気楽な労働者を描きながら、自らは授業準備という時間外労働を主体的に行うことを説明することで、社会から見える(と本人たちがみなしている)その一般像に抗っていることを示唆している。また規範を利用することによって調査者自身の主張や関心がインタビューにおける相互行為を方向付け、その結果として調査者自身が待遇の問題が矮小化していることを明らかにしている。

第6章も第5章と同じ課題設定で、キャリアをめぐるトピックにおいて、カテゴリーの序列化を伴う極性質問を行なっている場面を取り上げ、その質問の仕方と回答の仕方を記述している。具体的には、まず調査者は「専任>非常勤」という目指すべき職位という基準によるカテゴリーの序列化を使用して「専任として働きたいと思ったことがあるはずだ」という趣旨の質問を構成していた。それに対して調査協力者は（もしくは調査者自身が）その序列化に抵抗をし、「日本語教師の本来あるべき姿」という基準や、自らの帯びる複数のカテゴリーの中での「自らの中での価値」という基準によって、非常勤講師がより価値のある存在であるという序列化を行うことで、自らが非常勤講師でいることの説明を達成していることを記述している。そしてその説明の達成の中で、「日本語学校という組織は学生の利益を損なうような存在である」、「大学で教える日本語教師は学問知識がある研究者」、「日本語学校で教える日本語教師は学習者のニーズに答えるためにあらゆる手を尽くす職人」、「扶養されている女性はその範囲内で働く」、「非常勤講師は時間的収入的制限がある中でも行える都合のよい仕事である」といった規範が記述された。これらの規範からは一般的に想定されるキャリアのヒエラルキーとは別の、独立した文脈に自分たちを置いていることや、労働への価値が学習者への献身に傾いていること、「非常勤講師」という働き方を肯定的に捉えてはいるが、一方で「非常勤講師」という雇用形態が積極的に選び取られたわけではなく、「家庭を持つ女性」にまつわるジェンダー規範によって選択されていることがわかった。またこれらのインタビューの質問に利用されるカテゴリーの序列化によって、他カテゴリーとの対立を引き起こす可能性も明らかにしている。

第7章では、まず第4章から第6章までの分析と議論をまとめた上で、本研究の日本語教育への示唆と日本語教師研究への示唆を示している。まず日本語教育への示唆として、非常勤講師たちが時間外労働を主体的選択の結果による行為だと主張していること、そして当事者以外も、無意識のうちに非常勤講師の奉仕的活動に期待していること、この二つの合理の歯車が合うことが結果として「聖職者的教師像」的な規範の維持につながっていることをまとめている。その上で、この規範について日本語教育を担う人の誰もが省察的に考えることの必要性を示唆している。そして日本語教師研究への示唆としては、研究インタビューにおける特定のカテゴリーについての質問が、自らが属さない他カテゴリーとの分断と対立を実践する危険性を孕んでいることを提示している。また反対に、自己の帯びる複数のカテゴリーとの対比が行われた場合、そこからはその対比の構造を読み解くことで経験の輪郭を描くことによる、当事者以外の人々による当事者の合理への理解可能性を示唆している。そしてこれらのことを明らかにした分析方法である成員カテゴリー化装置と会話分析の有用性もここで示している。また本章の後半では、本研究の課題と展望についても述べている。まず本研究の分析が社会的状況とデータの解釈を紐づけてマクロな問題にまで議論を展開せずに、規範の記述と相互行為のやり方から照射される事柄のみを記述するにとどまっていることを挙げている。また研究方法においては、より精度の高い分析と記述、インタビューという制度的場面における連鎖の特徴により焦点を当てることを課題として挙げている。その上で、今後の展望として、より精緻化された記述から、日本語教師の労働の問題を取り巻く社会構造を論じることにより、研究知見のさらなる蓄積を提案し、本研究全体を結んでいる。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　勝部三奈子　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主査　教授	義永美央子
	副査　准教授	岡田　悠佑
	副査　教授	日野　信行

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本国内で働く日本語教師の中で最も大きな割合を占めながら、これまで学術研究において光を当てられることが極めて少なかった日本語学校の非常勤講師に焦点を当てる。日本語学校の非常勤講師は、一般的には雇用状態が不安定であり、労働に見合った報酬を得ることが少ない、周縁的な存在と位置付けられることが多い。こうした状況に置かれた非常勤講師たちが自らの仕事についてどのように語るか、そして、公的な会議の議論において有識者たちが非常勤講師にどのように言及するかを、場面意味論を介した成員カテゴリー化分析および会話分析を用いて記述・分析し、非常勤講師を取り巻く労働世界の一端を浮き彫りにすることを目指している。

本論文は全７章で構成される。第１章で研究の背景と目的を述べた後、第２章では、これまでの日本語教師に関する研究の多くが日本語教師を教育者とみなし、教育実践の改善を目的として議論を展開してきたことを指摘する。そして、社会学的な観点から日本語教師を一つの職業と捉え、日本語教師が経験する労働世界を分析の俎上に載せることの重要性を主張する。研究方法を論じる第３章では、社会学、特にエスノメソドロジーの関連分野として発展を遂げてきた成員カテゴリー化分析と会話分析を紹介した上で、成員カテゴリー化分析に関する批判を乗り越えるために、場面意味論を援用することの意義を述べる。また、データの採取方法や各章で分析するデータの特徴についても論じている。続く第４章では、文化審議会国語分科会日本語教育小委員会の議事録に見られる出席者たちの発言を分析対象として、出席する有識者たちがあるときは「非常勤」に「プロ」としての専門性を、あるときは「ボランティア」的な献身を求めることによって、不安定な雇用状況でも献身的に教育活動に従事するという「非常勤」像を構築していることを提示した。さらに、非常勤講師自身が参加した相互行為を分析した第５章・第６章では、インタビューの質問と回答の連鎖、特に非常勤講師たちの回答の矛盾をつくように構成された挑戦的質問や、カテゴリーの序列化を伴う極性質問とそれらへの回答の仕方に注目し、発話連鎖の中で観察されるカテゴリー化の実践を記述している。そして、授業準備という報酬を伴わない時間外労働を主体的に行っているという説明や、他カテゴリーとの比較において非常勤講師がより価値のある存在であるという序列化を行うことで、非常勤講師自らが非常勤講師でいつづけることの合理を示していることを明らかにした。結論を示す第７章では、ここまでの議論をまとめた上で、非常勤講師たちが自らの置かれる労働環境や労働条件を主体的に選択していると主張することや、当事者以外も無意識のうちに非常勤講師の奉仕的活動に期待していることの結果として、非常勤講師は劣悪な労働環境を意に介さず、学習者に奉仕する「聖職者的教師」であるべきだという規範が維持されていることを主張する。また、非常勤講師たちの語りは、時間外労働を厭わず授業の準備や実施に没入する「職人」的な教師像を是とする一方で、言語や教育に関する学術的な検討や、学校で行われる様々な管理業務を相対的に重要ではないものと見做している。社会の変化に伴って教師の役割そのものが大きく変容しつつある昨今、労働問題を矮小化し、教室での教授技術のみをひたすらに磨くことが日本語教師の専門性や教育の質の向上に資することなのかについて、非常勤講師自身の省察の必要性が指摘される。また、インタビューの場で特定のカテゴリーに言及することが、自分たちが属さない他のカテゴリーとの差異化の契機となる危険性を指摘し、対話的に構築されるインタビューにおける調査者の立場についても再考を促している。

本論文の結果は、非常勤講師が自らを抑圧された労働者としてではなく、独立した専門家と捉え、一般に想定される日本語教師のヒエラルキーとは別の文脈で理解していることを示している。こうした当事者の理解のあり方を、学術的な手続きに基づいて定式化し、他者にも広く共有可能なものとして明らかにした意義は大きい。また、

近年の質的研究においては研究者と研究対象のリフレクシビティが問われる中で、インタビューにおける調査者自身の発話そのものが他者との分断や対立を促進しかねない側面を孕んでいることに言及した点も評価できる。ただし、カテゴリーや規範といった基本的な概念の定義にやや舌足らずな部分があった点が惜しまれる。また、本論文の議論はエスノメソドロジー的な関心に基づいて展開されており、日本語学校の組織のあり方や経営状況、非常勤講師たちのジェンダーの問題といった観点への言及は意図的に抑制されている。今後はマクロな社会的文脈にも目配りした議論や分析が期待されるが、それは研究のさらなる発展の可能性を示すものであり、本論文の価値を大きく損ねるものではない。

以上のように、本論文を博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。